

---

# めだかボックスのおはなし

キイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

めだかボックスのおはなし

### 【Nコード】

N0817X

### 【作者名】

キイナ

### 【あらすじ】

ふしぎなふたこのおはなし。

『普通』 (前書き)

キイナ。

『普通。』

双子だった。

生まれたのは双子だった。

男女の双子だった。

女の子の方は髪と眼の色が、黒がかかった茶色のような微妙な色をしていた。

男の子の方は髪と眼の色が、茶色がかかった黒のような微妙な色をしていた。

微妙微妙と言っけれど、その双子自体は普通だった。

普通で普通な普通の双子。

特別普通という訳ではなかった。

世界中の誰もが普通と答えるであろう。

そんなものだった。

普通に普通。

だけど。

世界中の誰もが。

何かが異常と答える<sup>おかしい</sup>だろう。



『普通。』（後書き）

作者、キイナ。  
中一女子。

『ただただ愛した。』（前書き）

一話から最終話までのあらすじは全て頭の中。

考える必要は、無い。



『ただただ愛した。』

双子の母親は双子を愛した。

おかしい  
異常事など気にせず。

ただただ愛した。

普通の母親なら、『捨てる』という考えも浮かんできたかもしれ  
ない。

しかし、双子の母親は。

その考えこそが異常おかしいと思っていた。

だから愛した。

ただただ愛した。

ある日、母親はふと考えた事があった。  
それは。

子供の将来であった。

もしこの異常おかしいのせいで、トモダチがいなくなってしまうたら…。

もしこの子達が孤立してしまったら…。

それが母親の最大の悩みであつた。

『ただただ愛した。』  
（後書き）

トモダチって何？

『色々な人』

双子は二歳になった。

母親はある決心をした。

病院に連れて行こう。

別に異常だからでは無かった。

やはり双子の事を心配し、連れて行く事になったのだった。

その病院は普通では無かった。

そこは、『異常』な子供が集められる医療機関。

『異常性』が何のためにあるのかを検査するための場所。

双子は。

そこで色々な人に出会ったのであった。

待合室。

双子は仲良く絵本を読んでいた。

女の子の方はにこにこ笑いながら男の子と一緒に絵本を読んでいた。

男の子の方は冷静な表情を浮かべていた。

待合室では、紫の髪をした女の子と、双子と。

気味の悪いボロボロのうさぎのぬいぐるみを持った白髪の男の子が並んで座っていた。

『色々な人』（後書き）

異常とか、過負荷とか。

2つも作らない。

だって、異常とかは能力じゃ無い。

2つもあつたら人格が2つあるということ、だから。

『それは違うよ』

紫の髪、と言うより紫に見える黒い髪色だった。

その子は何かが待ち遠しいような。

そんな表情をしていた。

その時。

『まったく』

『なんのためだなんて』

『みんな大人のくせに』

『的外れだよねえ』

白髪の男の子だった。

紫の髪の子も、双子も。

その白髪の子に注目した。

それもそうだった。

変わった喋り方だと全員が思った。

『人間は無意味に生まれて』

『無関係に生きて』

『無価値に死ぬのに決まってるのにさ』

『きみもそう思うだろう?』  
『えーと』

『めだかちゃん?』



紫の髪の子の事を言ったのであろう。

にやりと気持ちの悪い笑みを浮かべながら白髪の男の子は言った。

紫の髪の子は、少し驚いたのが、口を開けて聞いていた。

「球磨川くん」

「5番検査室に入ってくれるー？」

看護師の声に応えるように、白髪の男の子は立ち上がった。

ドサッ、とボロボロのうさぎのぬいぐるみが椅子から落ちた。

『きみもきつといっぱい人を「終わらせて」ここに來たんだよね』

『いいんだよそれで』

『僕やきみはなにをしてもいいんだ』

『だって世界には目標なんてなくて』

『人生には目的なんてないんだから』

ずるずるとぬいぐるみを引きずりながら去って行くのを、紫の髪の子は、なにかに惹きつけられるようにして見つめていた。  
その時。

「それは違うよ」

双子だった。

双子の一人、女の子の方だった。

「意味あるよ」

「意味がある事だってあるもん」

『…。』

「目標だって目的だって、あるもん！」

「こらこら」

もう一人がツッコミを入れなければ、きっと永遠に同じ事を言っていたであろう。

『じゃあ』

『どんな目標や目的があるって言うんだい？』

「それは自分で考えなさい！」

「ちよっと、それは無いよ」

「球磨川くーん？」

『ああ、呼んでる』

『行かなくちゃ』

「逃げるな！」

「こーら！」

『そんな事言つて』

『本当はきみもわからないんですよ？』

「なにッ!？」

「はい静かにー」

「わかんないなら、考えればいいんだよ！」

『…じゃあね』

「あー！ちよつと待…」

「いい加減にしなよ」

「陰陽日陰くーん、陰陽日向ちゃん」

「あ、呼ばれた」

「ほら、行くよヒナ」

「めだかちゃんかな？わたし、日向！こっちはカゲくん…じゃないや、日陰っていうんだ！よろしくね」

「よろしくー」

「…」

「さて、行こー！バイバイ！」

「バイバイ」

強引に自己紹介されためだかは、動けなかった。

これが、陰陽日陰、日向、黒神めだか、球磨川楔が出会った時だった。

『負けないで』

日陰と日向が看護師について行く時に、「球磨川」と呼ばれた男の子とすれちがった。

二人は全くといっていいほど気にしなかった。

それが意外だったのか、すれちがった瞬間、「球磨川」と呼ばれた男の子は振り返った。

否、

振り返ってしまった。

二人にとっては、用も無い相手を気にする事などなかった。

それほど、「球磨川」は二人に普通と見られていた。

ただ、気味が悪いだけの、普通とは見られていた。

二人が診察室の様な場所に入ると、いかにも小学生らしき少女が椅子に座っていた。

「えーと、こんにちはー！わたしは、陰陽日向ですっ！」

「ぼくは、陰陽日陰です。よろしくお願いします！」

「よろしくね！日向ちゃんに日陰くん！」

「私は担当医の人吉瞳。こう見えても子供がいるのよん」  
人吉瞳は、こう見えても子供がいる。

「えっ。先生お子さんいるんですか？男の子ですか？女の子ですか？仲良くなりたいなー」

「男の子よー。是非仲良くしてね」  
「へー。ぼくも仲良くしたいです」

人吉瞳は焦っていた。

初めてだった。

異常ではない異常おかしさをみるのは。

「日陰くん、日向ちゃん。あのね」

「え、なんですか？私わたしなんでも聞きますよ、ね、カゲくん！」

「はい」

「そう、じゃ、聞いてくれるかしら」



「あなたたち二人、これから何があっても負けないで」

「え…？」

訳がわからないといった表情で、オロオロとする日向。

日陰は、至って冷静な表情だった。

「あなたたちには、何かがある。その何かが、まだわからないのだけど」

「だけど、絶対負けないで。いい？」

「…はい！」

「そっか。よかった！これで診察はおしまいなんだけど、そうだな…。お母さん、呼んできてくれるかな？」  
「そしたら終わりよ」

「はい！」

「さようなら！」

「さよならー」

二人は元気よく診察室から飛び出して行った。

『雰囲気だ。』

二人が出て行った後、人吉瞳は考えていた。

二人の事を。

そっくりそっくり。

二人ともすごい外見似てるよね！。

でも何か違うな。

髪と眼の色？

目つき？

日陰くんの方がちょっとクールな目つきしてるよね。

あ、そっか。

雰囲気だ。

雰囲気がちょっと違うかな。

「せんせー！人吉先生！」

「連れてきましたー」

「あ。ありがとう。でも、お母さんだけでよかったんだけど……！」

人吉瞳は振り返った。

そこには、可愛い少女がいた。

「えっと……。日陰くんと日向ちゃんの、お母さんですか……？」

「はい。私が、この子達の母の、陰陽陽差《ひざし》です」

につこりと微笑みながら少女…否、陽差は言った。

栗色のカールした長い髪。  
髪と同じ色の目。

どこからどうみても、中学生くらいの少女であった。

「あ、日陰くん日向ちゃん。待合室で待っていてくれる？」

「はい」

「さて、何から聞こうかしら…。まず、あなた年は？」

「あ、18です」

「18……」

「ごめんなさい。私、こんなにちっちゃくて。二人も将来ちっちゃくなったらどうしようとか。思ってるですけど」

「あら、大丈夫よん。ちっちゃいほうが可愛いもの」

「そうですかね」

二人はそんな会話をしながら、だんだんと本題に入っていった。

『私の子供ですっ!』

「あの二人の『何か』には、あなたは気づいてた？」

「はい」

「あなたは、どう思うっ?」

「……………」

「私は」

「私はあの子達に何があったって、私の子供ですっ!」

狭い部屋に声が少し響く。

「ん、合格。よかったわ。…………しばらくは通院してもらっけど……いい?」

「はい。大丈夫です」

「それじゃ、今日はもう終わりよ。また後日、ね」

「ありがとうございますっ」

あの幼さがまだ残る若き母親に、二人を任せるのが不安だった。

しかし、若き母親の覚悟を、人吉瞳は感じていた。

しばらくは、大丈夫よね……。

そんな事を考えながら、人吉瞳は次の診察の準備をしていた。

次の診察が、



一生忘れられない診察になるとも知らずに。

『高校生だよ?』

「ヒナ―! まだ―?」

「ちょ、ちよつとまって―!」

「入学式遅れるよ―!」

「今行くよ―! ……あつ……………」

「何?」

「ハンカチ忘れた! もうカゲくん先行つてて―!」

「やれやれ……………」

「入学式長かった……」  
「みんなそんなもんだよ。だって高校生だよ？少しはしっかりしなよ」

半ば呆れた様な顔をしながら日陰はため息をついた。

「そ、そんな事より教室いこーっ！」

「誤魔化すな」

二人が入学したのは、箱庭学園という、それはもう素敵すぎるほどの学園だった。

とてつもなく広い敷地。

設備は十分に完備されており、さらには時計台まであった。

その学園には、1組から13組まであり、13組の生徒は登校義務が免除されている。

なにせ、13組の生徒は全員が、アフノーマル異常なのだ。

さらには、ノーマルベシヤル普通特別と分けられていた。

もちろんあの双子が、そんな事を知っているわけがなかった。

『俺は人吉善吉。』

「えーっと……………」

日向は明らかに動揺しながら言った。

「見えない……………！」

「背が小さい事を恨むよ……………」

日陰が答えた。

たしかに二人の背は、ものすごい低い。

そのせいで、クラス分けの紙が見えなかった。

「しょーがない。人がいなくなるまで居よつか」

ため息をつきながら座り込む日向。

その時。

「おっ、何してんだ？」

見慣れない男子生徒が居た。

「んー？背が低いから紙が見えないの。人がいなくなるまで待ってるんだー」

拗ねた様な表情で、日向は『背が低いから』の所を強調して言った。

「そんな事してたら遅刻するぜ。俺が見てきてやるよ」

「え！？ほんと！？」

「ああ、名前教えてくれや」

「私は陰陽日向ーっ！で、こっちが日陰だよ！」

「双子か？よく似てるなー。目つきのせいでだいぶ印象違うな」

「カゲくん暗いー」

「見た目だけ」

そうしてその男子生徒は人混みを突き抜けてクラス分けを見に行った。

「おう、俺と同じクラスだぜ！」

「ほんと！？へー、すごいねー」

「てゅーか早く行こうよ。遅刻するよ？」

「ああ、分かってる、俺は人吉善吉。よろしくな！」

「善吉……………！？」

「善吉……………」

「うん？どうした？」

「なんでもないよ…。ほらっ、早くいこ！」

「お、おう」

そうして三人は教室へ向かって行った。

『そんな印象に残る事では無かった』

入学式の日の夜、日向と日陰は自分達の部屋でゴロゴロしながら漫画を読んでいた。

「うーん……………。ちえ、善吉。覚えてないのかなあ……………」

日向がぶつぶつ呟いている。

「しょうがないよ。もう、ずっと前の話なんだから、ね」

ごろりと寝返りをつつて、日向は枕に顔をうずめた

「まあ、そんな印象に残る事では無かったしね……………」

寂しそうに語る日向を見て、日陰が。

「うん、気にしない気にしない」

「うーん……………」



「やっぱり気にするなあ……………」

「え、何？ヒナ、善吉の事好きなの？」

「それは無い」

「ず、随分あっさり……………だね……………」

その夜、二人はいつもより早く寝た。

『頑張るねえ。』

「世界は平凡か？」

「未来は退屈か？」

「現実 is 適当か？」

「安心しろ」

「それでも」

「生きることは劇的だ！」

「いや、安心はできないでしょー。ゲキテキなんだから」

日向が小声で茶々を入れる。

「いいんだよ、そーゆーことは気にしなくてー」

それを日陰が制す。

いつもの日常だ。

「そんなわけで本日より、この私が貴様達の生徒会長だ」

置いてあるプレートに書かれた文字、『生徒会 会長  
めだか』。

黒神

「学業・恋愛・家庭・労働。私生活に至るまで」  
「悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい」

ものすごい偉そうな態度で、『生徒会長』は言う。

「24時間、365日」

「私は誰からの相談でも受けつける!!」

「おお。頑張るねえ。めだかちゃん」

日向がニヤニヤしている。

日陰はそれを、非常に冷たい眼で見ている。

『あー。』

一年一組。

ノーマル  
普通達の教室。

教室内は、『あの』生徒会長のせいでザワザワとしていた。

生徒達の噂話を楽しそうに聞いている女生徒がひとり。

「しっかしあのお嬢様！全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよねー！人前に立つのに慣れてるっつーかさー」

「カッ！」

その時、それまで机に突っ伏していたひとりの生徒が体を起こした。

「ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ」

「『人の上に』立つのに慣れてんだよ！」

どうしようも無さげと言った感じに言うこの生徒こそ、人吉善吉である。

「んー。あー、そりやそーだね。そーでなじゃー！1年生で生徒会長になんか、なれっこないか」

そしてこのきゅぽきゅぽと意味不明な効果音を出しているのが、不知火半袖。

善吉の親友である。

「それも支持率98%！ぶっちぎりのナンバーワンだもんねー！」

「かくゆづ、あたしもあのお嬢様に清き一票を捧げたわけですが」

不知火は、次々と生徒会長の説明をしていく。

「全国模試では常に上位をキープ！」

「偏差値は常識知らずの90を記録し！」

「手にした賞状やトロフィーは数しれず！」

「スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！」

「実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！」

「全長263・0メートル、高度6万フィートをマッハ2で飛行！  
インテル入ってる！」

「いや、途中から人類じゃなくなってる……………」

止まらない説明を止められるのは善吉だけなのだ。

「で？人吉はどうすんの？」

「あ？」

「お嬢様が当選したってことは、とーぜん人吉も生徒会に入るわけ  
なんですよ？」



ガタツと立ち上がりながら善吉は言い切る。

「カッ！」

「んなわけねーだろ！」

「確かにしつこく誘われちゃーいるが、これ以上あいつに振り回されてたまるかってのー！」

「俺は絶対！生徒会には入らない！！！」

ビシツと指を指しポーズを決める善吉。

その後ろには。

同じポーズをしている生徒会長、黒神めだかがいた。

不知火の時間が止まる。

「まあまあ」

「そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

「!？」

善吉の頭は、がっしりとめだかの手に掴まれていた。

その間に割って入ったのが。

「あー。めだかちゃんだー」

「ほんとだ」

日向と日陰である。

そんな事を無視するかのように響いたのは、善吉の絶叫だった。

『変わった趣味だな』

箱庭学園、生徒会室。

めだか達はそこにいた。

「……………つたく、普通に連れてくるってことができねーのかよ」

「生徒会長さん！」

めだかに引きずられ連れてこられた善吉が言う。

「ふん、私の誘いをすげなくし続ける貴様が悪い」

「それに！よそよそしい呼び方をするものではないぞ。昔のように、めだかちゃんと呼ぶがよい！」

凜とした態度で微笑むめだか。

説明しておく、箱庭学園における生徒会は通例、会長・副会長・書記・会計・庶務と、構成されるのだが。

何せ支持率98%の生徒会長である。

同格の生徒などそうそういるわけもなく。

全業務を会長一人で執行しているのが現状だ。

めだかの左手に五つの腕章全てがはめられているのは、そのためだ。

「カツ！そりゃキツイのはわかるけどな！だからって俺を巻き込むなよ！」

善吉が話している側で、めだかは鏡の前で着替え出した。

「お前って奴は昔からそうなんだ！！ことあるごとに、当然のように俺を道連れにする！」

めだかはすでに下着だけになっていた。

「俺の気持ちとか、俺の迷惑とか、ちっとも考えてくれねえ！付き合いきれねーんだよ、実際！」

さらにめだかは扇子を取り出し鏡の前でポーズを取る。

「大体！お前なら一人で生徒会業務をやり続けることもできるだろ



………って、うおおーっ！っ！っ！」

「あつ、当たり前みてエに人の後ろで着替えてんじゃねエよ！っ！お前はもつと恥じらいという概念を持て！」

ガタガタと椅子にぶつかりながら後ずさる善吉に、めだかは不思議そうに言った。

「何故だ？私と貴様の間に恥じらいなど、何の意味がある」

「少なくとも、小六まで私と一緒に風呂に入ってた男の言うことではないな」

「昔の話だ！っ！」

衝撃的な告白をしながら誇らしげに語るめだかに、善吉は顔を赤くした。

「それに善吉。私は仕事を手伝ってもらったために貴様を引き込み  
としてるわけではない」

「ああ？」

「私は生まれてこのかた一度も、仕事がキツイと思ったことなど  
ない」

「私に貴様が必要だから、そばにいてほしいだけなのだ」

「!!」

善吉は、さらに顔を赤くした。

「…あ、ああ!？」

「所で……………」

めだかはチラリと横を見る。

「貴様たちは誰なのだ？」

「あゝ、気にしないで。私たちはただ見てるだけだから」

「そういう訳にもいかない。私と善吉のこのやりとりをずっと見るのが趣味なのか？随分と変わった趣味だな」

「うわ〜…。今ちよつとイラつと来た……………」

「さあ、名乗るがよい」

「あー。私は陰陽日向。こっちは日陰。はいおしまい」

へらへらと笑う日向。

その横で表情を変えずにじっと立っている日陰。

「なるほど……………日向……………日陰……………か」

「よろしくね、めだかちゃん！」

その頃、一年一組では。

「あれ？人吉の奴どこ行った？」

人吉の机にはぬいぐるみが置かれていた。

「やあ日向<sup>ひなた</sup>くん。人吉はねー。さっきこわーい生徒会長さんに連れてかれちゃったんだよん」

「な、なるほど……。そーいやなんか選挙活動も手伝ってたみたいだけど、人吉と例の新会長って、どーいう関係なんだ？」

「あー。いわゆるひとつの幼なじみって奴ですよ」

「ま、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

『変わった趣味だな』（後書き）

2、3作目も出す。

この話とは関係ない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0817x/>

---

めだかボックスのおはなし

2011年11月26日19時57分発行